

解答事例

(1) 社会的ジレンマ

社会のなかで個人が協力的か利己的かを選択できる状況下で、個人にとって合理的な選択をすると、社会にとって非合理的な結果となってしまう状況を指す。

社会的ジレンマが起こる原因社会的ジレンマは、個人の合理性と社会的な合理性が乖離していることから起こる。人は自分の行動が社会に与える影響を小さく考えてしまう傾向がある。自分だけが行動しても大した影響はないし、反対に自分だけがきちんと行動しても問題の解決にはつながらないと考えてしまう。自分以外の他の人がきちんとしているなら、それにタダ乗りした方が手間や時間がかからないので合理的だと思うからだ。そのため、悲劇的な結果を予想することはできても、結果を回避するのは難しい。

(2) 外的報酬による内発的動機づけの阻害効果

人はなぜある行動をするのだろうか。好きだからといった内的な要因と、それをする事で報酬が得られるという外的要因が考えられる。どちらか一方の要因があれば行動するだろうから、ここでも割引原理が働くと考えられる。もともと報酬がなく好きでやっていた行動に対して、報酬が存在するようになると、自分の興味を割り引いて考える。つまり、好きだからやっているのではなく報酬のためにやっているのだと自分で考えるようになるのではないだろうか。

デシ (Deci) の興味深い実験は、内発的に動機づけられている行動に対して報酬を与えると、その後最初の水準より内発的動機づけが低下してしまうことがあることを示している。

(3) 短期記憶・ワーキングメモリの容量(7+-2)

ワーキングメモリーは、感覚情報、または想起した宣言的記憶などを、数秒から数十秒の間、短期記憶として頭に思い浮かべたまま保持し、それを用いて意思決定や計算、発話、思考など、他の様々な認知機能を実行する為の、脳の機能である。

一度に憶えられるワーキングメモリーの容量には上限があり、若い人で7つ前後、頭の中で繰り返すリハーサル等を統制してより厳密に数えると、4つ前後とされている。しかしこの数は状況に依存する。例えば、まとまった事柄を一つのかたまり(チャンクと呼ばれる)として扱い、このチャンクを単位として憶えておく事で、その中身の数で数えた場合の上限数が実質的に多くなる事が知られている。

(4) セルフ・ハンディキャッピング

セルフハンディキャッピングとは、自分自身にわざわざハンディキャップを付けて、本当の実力を発揮できない状況を作り出すことをいう。失敗しても全力で取り組みなかったからだ、自分の能力が低く評価されるのを防ぐことを期待して行う言動である。

2つの原因からどのように結果が引き起こされるかについて下記のような A,B の2つの場合を考えることができる。Aは例えば、歴史的な発明や発見をするという場合である。

A			B		
	努力した	努力しない		努力した	努力しない
能力あり	成功	失敗	能力あり	成功	成功
能力なし	失敗	失敗	能力なし	成功	失敗

このようなことをするためには、努力も能力もともに必要になるだろう。しかし、学校の試験でよい成績をとるのは、これより簡単で、Bのような状況かもしれない。Bでは、一方の原因があれば結果が得られる。つまり、能力があればそれほど努力しなくてもいいかもしれないし、能力があまりなくても努力すればよい成績を得られるかもしれない。Aの状況では、ある結果が起こった、たとえば歴史的な発明をしたということがわかれば、2つの原因がともに存在する、つまり能力もあり努力もしたと考えることができる。ところがBの場合は、結果が生じたことがわかり、さらに一方の原因が存在することがわかっても、他方の原因が存在するかどうかは本来わからない。しかし、このようなとき私たちは一方の原因が存在するといわれると、他方の原因は存在しないと考える傾向がある。「A君はよい成績をとり能力がある」といわれるとあまり努力しなかったのだろうと推測し、逆に「A君はよい成績をとり努力した」といわれると能力があまり高くはないと考える傾向がある。これを割引原理という。こうした割引原理が働くために、努力を過度に強調すると、能力がないと思われているのだというメッセージとして受け取られてしまう危険がある。そこで努力することをあまり人には見せない、あるいは努力を放棄してしまうといった現象が起きる。

(5) 自己開示

自己開示とは、自分に関する情報や考え、価値観などを、そのまま率直に相手へ伝えることである。内容には、自分の強みだけでなく、悩みや弱みなどの弱点も含まれる。一方が自己開示すると、相手も自分について話しやすくなるため、相手と信頼関係を構築しやすくなる。自己開示を繰り返すと、自分に対して相手が心を開くようになり、より踏み込んだ話がしやすくなる。人は自分に心を開いている相手に対しては、自然と自分も心を開いて話す、という自己開示の返報性が働くからである。

2025 年度 博士前期課程入試 前期日程
社会人選抜・小論文・共通問題

問題Ⅰ 以下の3問について解答しなさい。文頭に問題番号を明記すること。

2. 心理学で利用される統計法の4つの尺度について、その特徴について説明するとともに、それぞれの尺度に該当する具体例を記述しなさい。(20点)

心理学で利用される統計法の4つの尺度とは「名義尺度」「順序尺度」「間隔尺度」「比例尺度」である。

名義尺度とは、対象を分類・区別するもので、順序や量は考慮しない。例としては、性別、名前、背番号などである。

順序尺度とは、対象を順位付けするものであるが、順序間の差は考慮しない。例としては、陸上競技の順位などである。

間隔尺度とは、値の間の距離が同じ意味（等間隔に並んだ数値・得点）を示すが、絶対ゼロ点はない。例としては、温度計、年代などである。

比例尺度とは、等間隔と絶対ゼロ点を有する最も情報量の多い尺度である。例としては、重量や距離などである。

3. 心理学の調査・実験で利用されるサンプルサイズ設計について、実施するメリットを倫理的配慮の観点も含めて説明しなさい。(10点)

・サンプルサイズ設計の分析を行うことで、「統計的な信頼性の確保」「統計的検出力の向上」のメリットがある。

・また、倫理的な配慮として、サンプルサイズ設計を行うことで、対象者を過剰に集めて時間・資源の浪費や参加者に対する不要な負担を防ぐことができる。

< ChatGPT >

心理学の調査や実験において、サンプルサイズの設計は非常に重要なステップです。適切なサンプルサイズを決定することには以下のようなメリットがあり、倫理的配慮も関わっています。

1. 統計的な信頼性の確保

適切なサンプルサイズを設計することで、調査や実験の結果の統計的な信頼性が高まります。サンプルサイズが適切であれば、結果の誤差が小さくなり、得られたデータが真の効果や関係を反映する可能性が高くなります。これにより、研究結果の再現性や一般化の妥当性が向上します。

2. 統計的検出力の向上

サンプルサイズが適切であれば、調査や実験において検出力（効果を正しく検出する能力）が高まります。これにより、真に存在する効果を見逃すリスクを減らし、研究の精度が向上します。小さすぎるサンプルサイズは、効果を見逃す可能性があり、研究結果が無意味になるリスクがあります。

3. 倫理的配慮

適切なサンプルサイズの設定は、倫理的な観点からも重要です。必要以上に大きなサンプルサイズを設定すると、余分な参加者が必要となり、時間や資源の浪費だけでなく、参加者に対する不要な負担を強いることとなります。逆に、サンプルサイズが小さすぎると、結果が不確実となり、無意味な実験に参加者を巻き込むことになりかねません。いずれも、参加者の時間や労力を無駄にすることを避けるために、適切なサンプルサイズの計画が求められます。

4. データの質の向上

サンプルサイズの適切な設計により、データの質が向上します。質の高いデータは、より信頼性のある結論を導くことができ、心理学の研究に貢献します。これにより、後続の研究や応用においても信頼性の高い知見が得られるため、社会的な貢献度が高まります。

まとめ

サンプルサイズの設計は、調査や実験の信頼性を高めるために不可欠だけでなく、参加者に対する倫理的な配慮としても非常に重要です。適切なサンプルサイズを設定することで、研究結果の信頼性を確保し、無駄を省き、参加者に対する負担を最小限に抑えることができます。これにより、心理学研究の質を向上させ、倫理的に公正な研究が実現されます。

1.

(1) 乳児の知覚研究でよく用いられる実験手法を少なくとも二つ取り上げ、その一般的な手続きについて、具体例を挙げながら、説明しなさい。

【模範解答】

一般的に用いられる実験法として、選好注視法、馴化・脱馴化法などがある。選好注視法では、複数の刺激を提示して、乳児がどのようなものを好むかを評価する。複数の刺激を順次、乳児に提示し、提示時間中どのくらいの時間、それらに注意を向けていたか（例えば、視覚の場合は、注視していた時間を計測）を調べ。有名な実験に Fantz による顔選好実験がある。この実験では、生後数時間から数ヵ月までさまざまな日齢、月齢の乳児に対し、いくつかの図版（白、赤、黄色の無地の円、文字が描かれた円、幾何学模様が描かれた円、人の顔のイラストが描かれた円）を提示し、注視時間を計測している。生後まもない乳児でさえ、単純な図形より複雑な図形を、特に人の顔への選好が強いことがこの実験で明らかになっている。馴化・脱馴化法では、同一の刺激を繰り返し提示し、乳児がその刺激に慣れて（飽きて）きたタイミングで刺激の種類を変え、そこで反応の回復（脱馴化）が起こるかどうかを確かめる。比較を行うために、刺激の交代を行わず最後まで同じ刺激を提示し続けた場合の結果と異なるかをみるのが一般的である。DeCasper による聴覚の実験が有名である。乳児にヘッドフォンを装着し、そこから [pa] などの音声 that 一定の間隔で提示する。乳児はおしゃぶりを咥えており、初めのうちは比較的早いスピードでおしゃぶりを吸うが、同じ音声が続くと慣れが生じて吸う頻度が低下していく。そこで音声の種類を変えた場合に（例えば、[pa] から [ta] に替える）、吸うスピードが増加するかどうかを確認する。この実験でも、比較対象として、同じ刺激を提示し続ける群を設け、頻度の差が生じるかどうかをみる。

【採点基準】

選好注視法、馴化・脱馴化法などの具体的な実験法が二つ記されていれば、各 3 点を与える（計 6 点）。また、それぞれの実験法について、上記のような具体的な実験手続きが記されていれば、各 4 点を加点する。両方ほぼ適切な解答がなされていれば、プラス 1 点を加点する。

(2) 「時間的展望」とはどのようなことを指すか、説明しなさい。

【模範解答】

われわれは、過去の出来事と関連付けていまの自分を評価したり、未来の目標を見据えながら今なすべきことをするなど、過去、現在、未来という時間の流れを念頭に置いた認知や評価を行っている。このような意識や態度のことを時間的展望という。時間的展望の代表的な研究者として Lewin があげられる。Lewin は、発達に伴い、時間的展望の精緻化が進むこと、遠い未来と過去の事象が現在の行動に及ぼす影響が強くなっていくこと、さらに願望と

実在の区別が明確になっていくことを指摘している。なかでも、青年期は時間的展望の発達において重要な時期であると考えられており、研究対象としても青年期を扱ったものが多い。その理由として、自分が何をなすべき人間として人生を歩んでいくか、つまりアイデンティティの確立という発達課題が主要なテーマとなるからだと考えられている。進路選択、就職など、自分の過去や未来への見通しをもって行動しなくてはならない局面が多く表れるのが青年期だからである。

【採点基準】

上記に記した通り、「時間的展望」という概念についての理解がおおむねできていることが確認できれば、10点を加点する。また、青年期が重要であることが述べられていれば、5点を加点する。

2. 縦断的研究，横断的研究それぞれの長所と短所について，説明しなさい。

【模範解答】

縦断的研究とは、同一の個人や同一集団を一定の間隔を置いて追跡的に調査する手法のことをいう。ある年に小学校に入学した児童を対象に、6年生まで追跡するなどがこれにあたる。例えば、毎年4月に身長を測定し、1～6年生までのデータをならべることで、身長がどのように伸びたか（一定のスピードで伸びるのか、あるいは段階があるのか）などを明らかにすることができる。これに対し、横断的研究では、異なる年齢集団を一度に調査対象とし、年齢集団間の発達的变化を検討する。先の例で言えば、ある一時点において、小1～小6までの児童すべての身長を測定して、その平均値を年齢順に並べるなどが行われる。これにより、長い時間をかけず効率的に身長の発達的变化を捉えることができる。

縦断的研究のメリットとしては、変化が起こる原因や時間の経過に伴う正確な変化のさまを捉えることができる、環境の影響、社会的条件の影響などを知ることができる、などがあげられる。いっぽうデメリットとしては、時間や費用、労力がかかるなどがあげられ、また時間の経過とともにドロップアウトが生じ、データ数が減っていくことなどがあげられる。

横断的研究のメリットとしては、短時間に、かつ効率的に多くのデータを集めることができる点などがあげられる。デメリットとしては、年齢ごとに対象者が異なるため、個人の正確な発達軌跡を描くことができない点などがあげられる。

【採点基準】

縦断的研究，縦断的研究それぞれの内容や特徴が正確に記されていれば、各5点（計10点）を加点する。また、それぞれのメリット，デメリットが記されていれば、各5点（計10点）を加点する。

臨床心理学領域 [前期] 解答

1. 次の用語について、その内容を簡潔に説明しなさい。4 問全てに解答しなさい。（20 点）

(1) 愛着障害

愛着障害は、幼少期の不適切な養育環境が原因で発生する精神的な問題であり、DSM-5 および ICD-11 では「反応性アタッチメント障害」と「脱抑制型対人交流障害」の 2 つに分類される。反応性アタッチメント障害は、養育者に対する反応が乏しく、感情的な交流が制限されることが特徴である。脱抑制型対人交流障害は、見知らぬ人に対して過度に親しみやすく、自他の境界が薄い行動が見られる。これらの障害の背景には、子どもの時期のネグレクトや虐待、頻繁な養育者の交代などがある。治療としては、心理療法や家庭環境の改善、適切な養育方法の指導が行われ、子どもが安全で安定した環境で育つことが重要である。

(2) Scientist-Practitioner model

「Scientist-practitioner model(科学者・実践者モデル)」は、心理学において理論と実践の統合を目指すアプローチである。このモデルは、1949 年に開かれたボルダー会議で提唱された。具体的には、心理学者が「科学者(Scientist)」としての研究と「実践者(Practitioner)」としての臨床実践を両立させるべきだとする考え方に基づいている。研究者としては、科学的な根拠に基づく知識の構築や新たな理論・治療法の開発が求められる。一方、実践者としては、臨床現場での介入や支援を行い、理論や研究結果を実践に応用する。このアプローチでは、理論と実践が相互に影響し合い、循環していることが特徴である。実践から得られた経験は研究にフィードバックされ、それがさらに新たな理論の発展や改善に繋がることによって、より効果的な支援が実現するとされる。

(3) 合理的配慮

合理的配慮とは、障害を持つ人々が平等に機会を得るために必要な調整や変更を行うことを指す。例えば、職場や学校での物理的環境の変更、必要な設備の提供、業務や学習方法の柔軟な対応などが含まれる。本人や保護者からの相談、本人側と事業者等との話し合い、合意した配慮の実施、実施した配慮の見直しというステップで行われる。合理的配慮は、その提供が過度の負担にならない範囲で行われるべきとされており、具体的な対応は個々の状況やニーズに応じて異なるため、話し合って検討する必要がある。これは、障害者の権利を保障し、社会全体が包摂的で公平な環境を構築し、差別を防ぐために必要なアプローチである。

(4) 重回帰分析

重回帰分析とは、複数の独立変数が 1 つの従属変数に与える影響を同時に分析する統計手法である。心理学の研究においては、複数の要因が心理的現象に関与することが多いため、重回帰分析は広く用いられる。例えば、ストレスレベル（従属変数）に対する年齢、収入、社会的サポート（独立変数）の影響を同時に評価することが可能である。重回帰分析を用いることで、各独立変数が他の変数の影響を統制した上で、従属変数に与える影響の大きさや方向性を明確にすることができる。

出題の意図

問題Ⅰ

- (1) 日常生活で問題となるゴミ集積場の無秩序状態について「社会的ジレンマ」の観点から説明する問題である。(1)人は自分の行動が社会に与える影響を小さく考えてしまう傾向があること(自分一人くらいの心理),(2)自分の都合の良い時にゴミ出しをすることが町内会のゴミ集積場の無秩序状態につながる(個人にとっては合理的な判断が社会としての最適な選択に一致しないこと)に言及することが期待される。
- (2) 内発的に動機づけられた行動に対して「報酬」を与える影響の負の側面について、心理学的知見から説明させる問題である。報酬は、特に生起確率の低い行動に対しては有効であるが、内発的動機に基づいて行われている場合には、報酬を与えるとそれがなくなった時に動機づけが損なわれる危険があることに言及する必要がある。
- (3) 短期記憶・ワーキングメモリの容量(7+-2)の観点から説明する問題である。一度に憶えられる短期記憶容量には上限があり、若い人で7つ前後であることについて言及することが望まれる。そのうえで、メモをとる、頭の中で繰り返す(リハーサル)、まとまった事柄を一つのかたまり(チャンク)として扱う、などの記憶方略について論述することが期待される。
- (4) 「セルフ・ハンディキャッピング」の観点から説明させる問題である。自分自身にわざわざハンディキャップを付けて、自分の能力が低く評価されるのを防ぐことを期待して行う言動であることについて論述することが望まれる。そのうえで、割引原理(私たちには、一方の原因が存在するといわれると、他方の原因は存在しないと考える傾向)が働くために、努力することをあまり人には見せない、あるいは努力を放棄してしまうといった現象が起きることに言及することが期待される。
- (5) 「自己開示」の観点から、人は自分に心を開いている相手に対しては自然と自分も心を開いて話すという自己開示の返報性について言及する必要がある。自己開示の内容には、自分の強みだけでなく、悩みや弱みなどの弱点も含まれ、相手との信頼関係の構築には、自分に関する情報や考え、価値観などを、そのまま率直に相手へ伝えることが有力な手段であることを説明することが期待される。

2.

心理学研究で扱われる名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比例尺度について、それぞれの特徴と相違点を理解し、具体的なデータと関連付けて説明できるかを確認することで、心理統計に関する基礎的な知識と理解を問うものである。

3.

心理学研究におけるサンプルサイズ設計の目的と必要性を理解し、適切な研究結果を得るための統計学的観点に加え、研究参加者の負担や必要以上の参加者を募集しないといった研究倫理の観点から、その意義を説明できるかを問うものである。

問題Ⅱ

[実験・応用心理学専攻]

実験・応用心理学における基本的な研究手法および主要な概念について、その特徴や意義を正確に理解し、適切に説明する力を問う。

[臨床・発達心理学専攻：臨床心理学領域]

発達心理学における基本的な研究手法および主要な概念について、その特徴や意義を正確に理解し、適切に説明する力を問う。

[臨床・発達心理学専攻：発達心理学領域]

発達心理学における基本的な研究手法および主要な概念について、その特徴や意義を正確に理解し、適切に説明する力を問う。